太陽にまじわる海

回想的詩人論

櫻井琢巳

河出書房新社

一睡の夢見の
伊勢の
いなのぼ

太陽にまじわる海

回想的詩人論

櫻井琢巳

河出書房新社

櫻井琢巳　さくらい・たくみ
一九二六年生まれ。茨城師範卒。日本ペンクラブ会員、詩誌『落下傘』主宰。
詩集――『夏が終わるとき』（一九六九年・思潮社）、『遠い火』（一九七七年・笠間書院）、『まぼろし』（一九八六年・矢立出版）、その他。
評論集――『地平と喪失』（昭和文学のイメージ）（一九七三年・麥書房）、『サナトリウムの青春』（一九八三年・矢立出版）。

太陽にまじわる海
――回想的詩人論

初版印刷　昭和六十三年二月十日
初版発行　昭和六十三年二月二十日
著　者　櫻井琢巳
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　東京　四〇四―一二〇一（営業）
　　四〇四―八六一一（編集）
振替　東京　〇―一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします
©1988, Printed in Japan
ISBN4-309-90037-2

目次

回想の出発

回想の秋　11

啄木をめぐる回想　15

ヴェルレーヌの情調の中から

「秋の歌」　19

「都に雨の降るごとく」　24

高柳重信と多行俳句

『群』・重信俳句の出発　31

多行形式と〈韜晦の詩型〉　35

重信俳句の到達点　40

金子光晴の世界

金子光晴論の方法(一)　46

金子光晴論の方法(二)　50

「くらげの唄」の詩想　54
「鮫」　59
なげきの旋律・「我が生に与ふ」　64
「血」　70
「蛾」の象徴するもの　77
「湖畔吟」　82
「三点」の系列　90
「かつこう」の世界　98

わが内なるランボオ

ランボオ体験と「谷間に眠る者」　103
ランボオ論の周辺(一)　107
ランボオ論の周辺(二)　111
年譜と評伝(一)　115
年譜と評伝(二)　120
『地獄の季節』(一)——告白の書について　124
『地獄の季節』(二)——予言的ヴィジョン　128

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『地獄の季節』㈢――ランボオ詩の優しさ　132
『地獄の季節』㈣――〈光り輝やく街々〉を望むもの　140
『イリュミナシオン』㈠――「大洪水後」　148
『イリュミナシオン』㈡――「少年時」のイメージ　152
『イリュミナシオン』㈢――「野蛮人」の思想　156
「母音」――女体の紋章学として　166
「永遠」――〈太陽にまじわる海〉　172
「酔いどれ船」㈠――反抗と挫折の主題　177
「酔いどれ船」㈡――さまざまな海景と冒険　182
「酔いどれ船」㈢――ヨーロッパを望むまで　191
「酔いどれ船」㈣――転調と終末　199

高田博厚・地中海の詩性

『フランスから』覚えがき　204
『分水嶺』と『ジョルジュ・ルオー』　208

ボオの詩をめぐる回想

詩人の肖像　213

「アナベル・リー」(一) 217
「アナベル・リー」(二) 222
「大鴉」の影 226
「大鴉」の構成論をめぐって 231

ボードレールと女

ボードレールと女 236
ジャンヌ・デュヴァル詩篇(一)——〈地獄〉の女 240
ジャンヌ・デュヴァル詩篇(二)——「髪」の詩想 245
サバチエ詩篇——「夕べの諧調」 250
マリー・ドーブラン詩篇(一)——「閑談」のイメージ 255
マリー・ドーブラン詩篇(二)——「旅へのいざない」 261

D・H・ロレンスの詩と思想

ロレンス体験 268
〈欲望〉と〈充足〉の詩 272
「河の薔薇」のイメージ 278
ロレンスの思想 282

最初の到着者――「新しい天国と地上」 286

アポリネールの影の下に

サナトリウムの季節 292

アポリネールの全体像 296

「地帯」(一)――新しい美学の出発 300

「地帯」(二)――愛の不毛を重ねた前衛詩 304

「恋を失った男の歌」 308

〈洗濯船〉の芸術家たち 313

「ミラボー橋」の影の下に 316

アポリネールの小説(一)――『腐ってゆく魔術師』 321

アポリネールの小説(二)――『虐殺された詩人』 326

『カリグラム』の詩篇 331

エリュアール・愛と自由の長い道

エリュアールの詩と地平 337

「花々と果実の紋章」 341

抵抗詩の周辺(一) 345

抵抗詩の周辺(一) 351
『愛・詩』の長い道 356

萩原朔太郎ノート

朔太郎詩の読み方 361
朔太郎の出発と転進 365
「愛憐詩篇」 370
『月に吠える』前期 374
『月に吠える』の背面史(一)——〈拾遺詩篇〉のイメージ 381
『月に吠える』の背面史(二)——朔太郎のドストエフスキイ体験
『月に吠える』後期 389
『青猫』の中のエレナ(一) 393
『青猫』の中のエレナ(二) 397
「郷土望景詩」と『氷島』 403

遠景の中の詩と詩人たち

丸山薫『十年』 413
ルイ・アラゴン「エルザの眼」 418

高村光太郎(一)――『智恵子抄』とその周辺　423
高村光太郎(二)――「雨にうたるるカテドラル」　429
回想のエピローグ
あとがき　439

裝丁　伊藤鐵治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

太陽にまじわる海——回想的詩人論

回想の出発

回想の秋

今年も夏が終わった。戦後三十九年目の夏が。すでに百日紅の花は咲きつくし、空の色も、地平をくまどる山の色も秋を告げる。

〈もう秋か！　――しかし、何故、永遠の太陽を惜しむのか。もしわれわれが聖なる光の発見に身をおいているのならば、――季節の上に死んでいく人々から遠く離れて。／秋。われわれの舟は、動かぬ霧の中から高まってきて、貧苦の港の方へ、火と泥でよごれた空を負う巨大な都市の方へ向きを変える。ああ、腐った襤褸、雨にうたれたパン、酩酊よ、わたしを苦しめた数知れぬ愛欲よ。〉このランボオの『地獄の季節』の「わかれ」の冒頭詩が、わたしの中に一瞬の花火のように拡がる。そして、その上に高柳重信の「軍鼓鳴り／荒涼と／秋の／痣となる」という多行俳句がひびく。秋は回想の季節である。わたしの秋はこの二つの詩句によって幕をあける。

わたしが詩とはじめて出会ったのは、いつだったか。少年の日に河井酔茗の「ゆづり葉」という詩に出会って、顔が青ざめたことがある。「ゆづり葉」は昭和七年に出た詩集の中の一篇で、「新しい葉が出来ると／入り代つてふるい葉が落ちてしまふ」ゆずり葉を歌いながら、人生もまたゆずり葉に似て大人たちはおまえたちにすべてのものをゆずって行くのだと子供たちに呼びかける。そして、おまえたちもいまは「鳥のやうにうたひ、花のやうに笑つてゐる」けれど、やがて大人になり、年をとって、すべてを次の世代にゆずるのだ。「そしたら子供たちよ／もう一度譲り葉の木の下に立つて／譲り葉を見る時が来るでせう。」と詩は、結ぶ。この詩には「ゆづり葉」に象徴された時間がある。そこには、あの浦島太郎の伝説におけるそれのような圧縮された思念と恐怖感はないけれども、諦観と悲しみの調べがあり、それが少年の日のわたしをうたずにはいなかったのである。

わたしが小学校五年生のときに日中戦争がはじまり、日本軍の中国侵攻が開始された。「愛国行進曲」が歌われはじめ、「出征兵士を送る歌」が軍歌のさきがけとなった。「麦と兵隊」「父よあなたは強かった」など多くの軍歌がレコードになり、また映画の主題歌となって銀幕に躍った。世はあげて軍国主義の色にそめられ、軍歌の時代となった。童謡や詩は小さく片すみに押しこめられ、音楽の教科書の中でわずかに光を放っていた。「七里ヶ浜のいそ伝い／稲村ヶ崎　名将の……」と歌い出された「鎌倉」は、国語（当時の「読み方」）の教科書で先ずならい、それが音楽（当時の「唱歌」）の教科書にも載っていて歌った。もう遠い昔なのでよく思い出せないが、少年の日のわたしには詩というものはふしをつけて歌うものであった。

わたしの少年時、夏になるとわたしの母は青い蚊帳の中でよく野口雨情の「船頭小唄」を歌った（原題は「枯れすすき」、中山晋平作曲）。「おれは河原の／枯れすすき／同じおまえも／枯れすすき……」

この「枯れすすき」の歌が母は好きだった。その頃母はまだ若く、三十歳をいくらかすぎた頃だったと思う。若い母が蚊帳の中で情感をこめて歌った「枯れすすき」の歌がいまもわたしの中にある。

クラの中の父の本箱からツルゲーネフの散文詩集の小型本を見つけたのは、大分成長した頃である。たぶん、わたしが師範学校に入って寄宿舎にいたときで、冬休みか春休みに帰省して見つけたのだったように思う。それは生田春月訳で、ドイツ語訳からの重訳であった。哲学書ばかり読んだ父が、どうしてこのような詩集をもっていたのかわからなかった。このツルゲーネフの散文詩はニヒリズムの濃い霧の中にあり、虚無の色でぬられたイメージは青年期にさしかかったわたしの青春を深い憂鬱の中にとじこめて放さなかった。戦争中の、次第に状況がはげしくなり、満目戦争風景の暗い視野の中で、それは死を予兆する白つばきの花を見るようであった。現在その本はさがしてもないので作品を引くことは出来ないが、老年と死を描いた作品やスフィンクスを描いた詩など虚無思想の濃い詩篇がいまもまざまざと思い出される。

時間的に前後するけれども、国語の教科書で出会った作品ではとくに心に残っているものに、森林太郎の「秋」と坪内逍遙の「桐一葉」の中の詩的韻文がある。「秋」は鷗外が軍医として参加した日露戦争の中で陣中詠として書かれた「うた日記」の中の一篇である。この「秋」については稿を改めて論じることにして、ここでは坪内逍遙の詩的韻文、「桐一葉」の中の一節について書いておこう。「桐一葉」は戯曲で第一段から第七段まである史劇である。関ヶ原の戦の後の豊臣をめぐる家臣たち。淀君は大野修理亮一派のざん言を信じて、片桐且元を討たせようとする。豊臣の社稷も終わりに近い。且元は「佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け」て、討手をのがれ、淋しく大阪城をあとにして居城茨木へとおちて行く。この画期的な史劇はシェークスピアの影響をうけて書かれており、韻文的なリズ

ムをもつ科白の美しさは格別である。

わたしが学習した小学校高等三年の国語の教科書に載っていたのは、この「桐一葉」の最後の第七段「長柄堤訣別」の場面であった。片桐且元と木村重成の長柄堤における別れを描いて哀切である。「百計こと〳〵く心と齟齬し、死すべき機をさへ失」った且元に、庭前の桐から最後の一葉が落ちてくる。「蕭条たる天地の秋」である。そして舞台は長柄堤に変わる。

晨鶏再び鳴いて残月薄く、征馬連りに嘶いて行人出づ、はや分かれゆく横雲や、残の星を一つづゝ、鐘が消しゆくいなのめの、長柄堤に秋たけて、一むら蘆に風黒く、ありあけすごき大川水、ゆきて帰らぬ浪の音、狭霧にむせび白らけゆく千草が蔭の虫の声、哀れはいとゞまさるらん、片桐市ノ正且元は、居城茨木へ立退かんと、従ふ郎党一百余人、丑の刻に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづ〳〵と、長柄堤にさしかゝる、(後略)(「桐一葉」第七段〈長柄堤訣別〉より引用。大正十五年・春陽堂版『逍遙選集』第一巻による)

わたしは四十年の歳月をこえて、何故この詩的韻文をおぼえていたのだろう。それは、一つには、この詩句が、わたしはあえて詩句と呼ぶのだが、七五調を基調とした韻文で構成され、長柄堤の別れの場面に先駆する秋の情景描写としてすぐれていたからだろう。一人の忠臣がざん言によって逆臣の汚名をうけ、涙をのんで舞台から消えて行く。歴史はすでに組織とその中の人間の欲望、欺瞞、盛衰をここに描いた。わたしは数年前、職場の一泊旅行のとき、湖のほとりの宿でマイクを握って四十年前にならったこの「長柄堤訣別」の一節を歌うように語った。まぼろしの三味線の音が耳をうち、わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com